

*QR Newsletter***第四紀通信**

Vol. 4 No. 5, 1997



石狩丘陵獅子内における当別層の斜交層理 [1997年大会プレ巡検]

Vol. 4 No. 5**September 30, 1997**

1997年日本第四紀学会論文賞	2	地底の森ミュージアムの御案内	7
学会巡検参加報告 (松山紀香)	4	1997年度第1回評議員会議事録	8
研究委員会1996年度活動報告	5	1997年度総会議事録	11
自然史学会連合シンポジウム	6	幹事会議事録	14
猿橋賞の推薦依頼	6	会員消息	15
日本サンゴ礁学会設立大会	7		

◆ 1997年日本第四紀学会論文賞

論文賞受賞候補者選考委員会（太田陽子委員長，小池一之，香原志勢，永塚鎮男，羽鳥謙三各委員）から1997年日本第四紀学会論文賞として、次の2編の論文の著者を選定した旨報告がありました。授賞理由と受賞者の抱負をここに掲載し、益々の研究の発展を期待します。

吉永秀一郎 『関東ローム層中に含まれる微細石英の堆積速度の約10万年間の変化』第四紀研究、第35巻第2号、87-97、1996

授賞理由

火山国日本では、山麓の段丘や丘陵を被って、いわゆる「ローム層」がほぼ連続して堆積している事が多い。その中には、給源の判明した広域テフラも挟まれているので、ローム層の堆積年代や堆積速度を容易に判定できる。また、深海底堆積物との対比も可能である。ローム層にはテフラ起源の物質と共に、種々の風成塵が含まれる。それらの内、微細石英粒は、広域風成塵として、冬季、北西の風に乗って中国内陸から運搬され、日本各地に堆積する。著者は、栃木県喜連川丘陵を被うローム層に含まれる微細石英粒の含有率（堆積速度）や炭素含有率の変化を酸素同位体比と比較し、過去10万年間の気候変動（北西モンスーン強度の変動）を復元した。この結果は、先に発表した十勝ロームの分析結果（第四紀研究、第34巻第5号）とも一致した傾向を示した。これらの成果は、SPECMAPの酸素同位体比変化曲線とも調和的で、日本各地に分布するローム層の諸性質（今回以上の分析項目もあろう）を分析すれば、それぞれの地点の気候変化を復元できる事を示したものである。

このように、容易に入手でき、しかも再現性のある資料を分析することによって、汎世界的な気候変化との対比を試みた点が、この論文のすぐれた点である。今後、分析地点を増やして、精度を向上させると共に、より古い時代（喜連川丘陵では数10万年）の変化を明らかにする事を期待したい。

.....

受賞者の言葉

吉永秀一郎（森林総合研究所 四国支所）



このたびは拙論文に対し、日本第四紀学会論文賞を与えていただき、大変光栄に思っております。関東地方の出身として、子供の頃から慣れ親しんだ赤土（ローム層）の成因については、地形・地質の分野に足を踏み入れたときより興味を抱いておりました。林業試験場（現森林総合研究所）に勤め始めて土壌鉱物の分析に携わるようになり、ローム層中には石英をはじめとして、本来、テフラにはあまり含まれない鉱物が多く混入していることを知りました。また、細粒なローム層の層位が必ずしも火山周辺で粗粒なテフラ

になるのではないことを知りました。これらのことから、ローム層がテフラならびにその二次堆積物と広域風成塵が混合して堆積したものであることが明らかになりました。また、このようなローム層の成因からローム層の堆積過程や風化過程を検討することにより気候変動が明らかになることが期待されます。

このような観点に立って、十勝、南東北、北関東、信濃川流域に分布するローム層の検討を進めてきました。本研究では、北関東のローム層中に含まれる微細石英の堆積速度の変動が、酸素同位体比曲線に示される気候変動と類似した変動を示すことを明らかにしました。この変動は冬季の北西モンスーンの変動を示しているものと考えられます。したがって、ローム層は中国大陸内陸部におけるレスー古土壌シークエンスと同様に、気候変化の指示者となりうると考えております。本研究で取り上げた微細石英の堆積速度以外にも気候変動を示している性質があると考えられます。これらの問題についても今後検討してゆきたいと考えております。

怠惰な性格のために分析が遅々として研究がなかなか進展しませんが、少しずつ進めてゆきたいと考えております。今後とも第四紀学会会員の皆様方の叱咤・激励を賜りますようよろしくお願い申し上げます。最後に、日頃、風成塵の研究に際しまして助言いただいている岩手大学農学部井上克弘先生、溝田智俊先生、一緒に研究を進めてきた東京都立大学理学部鈴木毅彦さん、島根大学総合理工学部木村純一さんに感謝の意を表します。

米田 稔・吉田邦夫・吉永 淳・森田昌敏・赤澤 威
『長野県出土人骨試料における炭素・窒素安定同位体比および微量元素量に基づく古食性の復元』
第四紀研究、第35巻第4号、293-303、1996

授賞理由

従来、発掘された古人骨はその形態から分類上の位置や生活状況など、さまざまな情報が得られるため、重視されてきた。昨今、骨コラーゲン内の炭素・窒素の同位体分析（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 、 $^{15}\text{N}/^{14}\text{N}$ の測定から始まる）および骨無機質における微量分析によって古食性解明の道が開かれた。著者らは長野県下の縄文中期（約4000年前）から江戸時代（約250年前）に及ぶ8箇所（38個体）の遺跡出土の38個体の人骨について上記検査を行った。その結果として、1)同位体分析から当該時期における主食は基本的にC3植物（例、クリ、ムクノキ、トチ、ホウレンソウ、イネ、ムギ、スギナ）であり、とくに中世まではその傾向が強いと

考えられる。江戸時代は $\delta^{13}\text{C}$ 値が高いが、 $\delta^{15}\text{N}$ 値も高いので、内陸部でありながら、海産物が利用されたと考えられる。内陸部庶民は日常的にヒエやアワを食したと推測されるが、これらC4植物の形跡は見受けられない。2)縄文時代北村遺跡人骨には炭素同位体比に性差が見られたが、理由は不明である。3)北村人骨1体分の微量分析から、C3植物の内容はシイ、クリを中心とするものであろうと示唆される。

古食性の研究は最近本邦でも手がけられているが、本論文は長野県という内陸の風土における4000年にわたる期間の調査であり、これにより日本における古食性の一端が解明され、第四紀研究に新しい分野を開拓した意義は大きい。もとより資料上の制約は大きく、研究は完成されたとはいえないが、食性の復元の望まれる今日、本研究のさらなる発展を期待したい。

受賞者の言葉

米田 稔 (国立環境研究所 化学環境部)



今回論文賞を頂いた論文は私にとって初めての投稿論文であり、全く予想していなかった受賞のお知らせを頂いたときは驚きました。論文作製にあたり鈴木継美・前国環

研所長、お茶の水女子大学・松浦秀治先生はじめ多くの先生方に有意義なアドバイスをご頂きました。ありがとうございました。化学分析を用いた人骨の分析は海外では比較的ポピュラーな研究分野です。しかし、日本の試料に関しては必ずしも研究例は多くなく、修士課程で研究を開始した当初は五里霧中の状況の中、不安を覚えることも度々でしたが、今回の受賞でこの種の研究も必要とされているということを確認できたと思っています。今後も精進したいと思います。

今回の研究は日本の先史時代遺跡から出土した人骨試料を扱い、考古学的な解釈にまで踏み込んだ内容でしたので、是非とも日本の考古学者から反論や批判を頂きたいという思いと、化学的な方法論でも議論ができる雑誌に発表したいという希望がありました。

人骨の化学分析による食性復元研究は主にJournal of Archaeological ScienceやArchaeometryといった雑誌に発表されていますが、これらの

雑誌は国内ではあまりメジャーではないという印象がありました。我が国では考古学教室が文学部に設置されていることもあり、考古学と分析化学の分野は必ずしも近いものとはいえません。その2つの分野の境界領域で仕事をしている人間にとっては、第四紀研究という学際的な学術雑誌は非常にありがたい存在です。今後も化学分析という切り口で自然人類学、考古学に関連した研究はもちろんですが、それに古環境変動という視点を加味した研究を行っていければと思っています。

最後に宣伝になりますが、現在私はつくば市にある国立環境研究所において加速器質量分析施設を中心に仕事をしております。この施設は環境試料中の長寿命核種(^{14}C , ^{10}Be , ^{26}Al , ^{36}Cl 等)のAMS測定を環境科学に応用することを目的とした施設で、NIES-TERRAという愛称を持っています。1995年9月から設置を開始し、調整を続けておりましたので皆様にはまだあまりお馴染みではないと思いますが、グラフィットによる ^{14}C 測定では目標とした0.3% (1 S.D.)の精度を約1mg炭素でほぼ達成し、実試料の測定を開始した段階です。それと同時に、国内では最初の ^{14}C 用気体イオン源の調整を行っています。この気体イオン源は二酸化炭素を直接測定することが可能であり、より微量の試料を低いバックグラウンドで測定できることが期待されます。 ^{10}Be に関しても、測定条件に関して最終段階の詰めを行っています。

現在の環境変動を理解するためには過去の環境変動を理解することが必須であるとはしばしば説かれるところです。今後、第四紀研究の分野で活躍なさっている諸先生方にご指導をお願いするとともに、是非NIES-TERRAをご利用いただけますようお願い申しあげます。是非お声をお掛け下さい。



日本第四紀学会総会において1997年論文賞を授与する鎮西清高前会長。8月6日、札幌・北海道大学学術交流会館大講堂にて、鈴木毅彦氏撮影

◆日本第四紀学会 1997 年大会プレ巡検

「札幌市周辺の古自然環境－200 万年前までの海陸の変遷をたどる」

参加報告

松山紀香 (ジー・アール)

プレ巡検は、8 月 5 日から 7 日にかけて北海道大学において開催された日本第四紀学会 1997 年大会に先立つ 8 月 4 日に、「札幌市周辺の古自然環境－200 万年前までの海陸の変遷をたどる」をテーマとして実施された。以下、見学順に概要を報告する。

Stop 1 B-Tm (白頭山苦小牧テフラ) を貫く砂脈と噴砂層 (道研究団地横遺跡発掘現場) : 北海道大学学術交流会館前を出発、北大北側の道研究団地横遺跡発掘現場で噴砂・砂脈などの液状化跡を見学した。砂脈は、10 数本からなる砂脈群を形成しており、B-Tm (白頭山苦小牧テフラ) を含む地層とその上位の腐植層 (耕作土) を貫いて噴出し、噴砂層を形成していた。砂脈の幅は最大 20cm に達し、噴砂層の広がりも東西 50 m、南北 10 m 以上であった。噴砂層の一部は Ta-a (樽前 a テフラ) に覆われているとのことで、火山灰との関係から、この液状化跡は、800～1739 年の間に生じたものとみなされているとの説明を受けた。遺構は B-Tm の直前にみられ、擦文時代の前期後半～中期前半 (10 世紀前期) の土器が出土していた。

Stop 2 紅葉山砂丘および後背低地堆積物 (紅葉山 49 号遺跡発掘現場) : バス内で石狩海岸地形の形成史について説明を受けながら、紅葉山砂丘の発掘現場に到着。北東－南西方向に延びる紅葉山砂丘は、縄文海進時 (約 6000～4000 年前頃) に形成された古砂丘で、宅地化されつつある低地の中に黒々とした林としてつらなっていた。紅葉山砂丘の内陸側基部のトレンチでは、発寒川による後背低地堆積物と紅葉山砂層とが指交関係にあるのが観察できた。

Stop 3 新砂丘 (石狩川河口付近の海岸) : 石狩海岸沿いの新砂丘の形成史と地形、および最近の 50 年間の砂浜の消長についての説明を受けた。新砂丘 I 上には Ta-a テフラが載り黒土を載せているが、3 列ある現在の新砂丘 II 上には、黒土がみられず Ta-a テフラが載らない。本州の沿岸地域ではごく普通にみられるクロマツ・アカマツ等は新砂丘 I 上にはみられず、カシワが繁茂していた。ブナが越えた津軽海峡を、マツが越えられなかったのは興味深い。ダム建設による土砂供給の減少が引き起こす海岸浸食は日本各地でも問題となっている。石狩海岸でも、銭函～石狩湾新港間の海岸浸食が顕著で、海岸線の移動は数 10 m に達している。石狩湾新港の北東側は堆積域で、明治初頭に石狩川の河口にあった燈台が、今や石狩川沿いの砂丘の中にポツンと立っているのが印象的だった。

Stop 4 当別層および中位段丘堆積物 (獅子内土取場) : バス内で石狩丘陵の新第三系－第四系の説明を受けながら獅子内土取場に到着。獅子内土取場では、露頭西方の俊別背斜の影響で緩く東に傾斜している後期中新世後半～鮮新世前半の当別層の上位に、不整合でほぼ水平な石狩高岡層 (中位段丘堆積物) が載

るのがみられた。露頭の当別層は、当別層中部の泥まじり細粒砂岩で、見事な斜交葉理が発達していた。土取場の常で、露頭の様子がどんどん変化し、かつて観察できた石狩高岡層中の洞爺火山灰層はみることができなかったが、当別層対比の良い鍵層となっている K4 火山灰層や望来層を遠望することもできた。

Stop 5 材木沢層 (材木沢土取場) : 当別川の支流の材木沢沿いの露頭で、材木沢層 (鮮新世末～前期更新世) の下部と上部の境界付近を見学した。露頭の下部最上部の材木沢層は、平板状斜層理の発達した細粒砂岩を主とし、レンズ状や葉理状の礫層を挟んでいる。上部材木沢層は礫層であった。説明では、一般に、材木沢層下部は瀕海～潟湖の堆積相を示すのに対し、上部は河口～河成堆積物の特徴を有し、下部から上部へと堆積環境は陸成化しているとのことであった。この土取場も再稼働を始めており、この見事な露頭もいつかは消えゆく運命にあるのだろう。

Stop 6 当別断層による低位段丘面の変形 (青山奥橋付近) : 増毛山地と樺戸山地の間を南北に流れる当別川は中山別付近の狭窄部以北の中流域に入ると段丘面の発達がよくなる。青山中央付近では低位段丘 (河床からの比高 8～10 m) と中位段丘 (同約 40 m) が分布するが、青山奥橋西側の露頭では、低位段丘が幅 60 m 程の間で約 15 m 西に撓み上がっていた。この変形は、当別断層によるとの説明であった。露頭は当別川の対岸にあり残念ながら断層面は見えなかった。

Stop 7 当別断層露頭と変位地形 (道民の森道路入口付近) : 当別断層が低位段丘堆積物を切る断層露頭。西から望来層が段丘堆積物の上にのし上げており、断層面の傾斜は西に約 30° である。低位段丘の河床からの比高は、当別断層の西側で約 20 m、東側は約 13 m であり、西上がりの変位量は 10 数 m である。段丘面上では当別断層を境にして西側の尾根状の高まりと東側の構造谷がセットになって、断層に沿って南北方向に延びている変位地形が観察できた。

Stop 8 当別断層による地形 (中小屋温泉周辺) : バスの中から地形を観察。南部当別断層は、当別川左岸の樺戸山地を斜めに横切り、中小屋駅付近以南では樺戸山地の東縁と石狩低地との境界をなしている。地形的にかなりの高度差のある山麓斜面がみられた。

以上で巡検「札幌市周辺の古自然環境－200 万年前までの海陸の変遷をたどる」は終わった。札幌周辺の第四系の典型的な露頭や微地形から海陸の変遷をたどり、また活断層露頭や液状化跡など地震に関連する分野まで、多岐にわたる収穫の得られた 1 日であった。最後になりますが、今回の巡検のガイドをして下さった北海道立地下資源調査所の岡孝雄氏はじめ、北海道立地下資源調査所、石狩市教育委員会、札幌市埋蔵文化財センターの皆様方のご苦勞に感謝申し上げます。

◆研究委員会 1996 年度活動報告

◎テフラ研究委員会（委員長：町田 洋）

今年度は次のような野外研究集会を行なった。

テーマ：八ヶ岳から房総半島にかけて分布する指標テフラと中期更新世の編年

日時：1997年4月3日～5日

場所：多摩丘陵～八ヶ岳山麓～甲府盆地～富士山麓～大磯丘陵～房総上総丘陵

案内者：鈴木毅彦・杉原重夫・町田 洋

参加者数：52名

概要：本州中部から房総半島にかけて分布する中期更新世（とくに40～25万年前頃）のテフラの認定を通じて、この時代の編年を後期更新世と同程度の詳しさとで解明することを目的とし、最新の知見や問題点が野外巡検で討議された。主要な話題は次の諸点である。1) これらの全地域に共通する諸広域テフラの層序、2) 海洋同位体ステージ11, 9, 7の層位の認定、3) 中部地方に起源する広域テフラの給源火山・年代・噴火堆積様式。また夜間に行なわれた小集会では、原山会員からテフラの給源地域の一つとしての中部山岳の地質、および檀原会員から最近のフィッシュトラック年代測定法についての話題提供があった。

◎INQUA/GLOCOPH対応研究委員会

（委員長：門村 浩）

（1）講演会の開催

1) 96.10.26.（於：東京大学）：Arie S. Issar (Ben-Gurion University of Negev, Israel) 「Natural desertification processes in the Levant during the Holocene」

2) 97.2.1.（於：東京大学）：Alison Jones (慶応大客員研究員) 「Quaternary geomorphology of the Tineta catchment, central Pyrenees, Spain, and the Dyfi catchment, mid Wales」, Pilar Casals-Carrasco (慶応大客員研究員) 「GIS applications for water hazard analysis: a case study in Tsurumi river basin」

（2）データベースの作成

GLOCOPH本部（英サザンプトン大）で作成されている「古水文学データベース」に、日本のデータを登録するためのプロジェクトを実行中である。この目的のために、文部省科学研究費（データベース）を門村・田村・平川・小元・斉藤・鹿島・小口が申請し、3年目の採択となった。

（3）サーキュラーの発行

講演会の報告、GLOCOPHプロジェクトに関する内外のニュースを含むサーキュラーを2回発行し、委員に配布した。

（4）国際会議の準備

第3回地球古水文環境変動（INQUA/GLOCOPH）国際会議が、1998年9月4-11日、立正大学熊谷校舎を会場に開催されることになった。このための実行委員会を組織し、準備を始めた。

◎海岸線研究委員会（委員長：大村明雄）

（1）1994年11月25日（当時、太田陽子委員長）開催の公開シンポジウム「日本列島における海岸環境の変遷—第四紀後半から現在まで—」で発表された研究成果を、小池一之・太田陽子編「変化する日本の海岸線—最終間氷期から現在まで—」として、古今書院より発行した。

（2）太田陽子前委員長を研究代表者、大村が研究分担者の文部省科学研究費補助金「南西諸島、喜界島の完新世サンゴ礁段丘の形成・離水過程の再検討」によるポーリング調査を“公開調査”とすることをアナウンスし、平成8年10月7日～29日の期間に実施した。その結果、東北大学・九州大学・琉球大学からの計3パーティが見学に訪れた。

（3）平成9年2月15・16日の2日間、神戸大学瀧川記念学術交流会館において開催されたIGCP国内委員会主催の特別シンポジウム「最近地質時代の地球環境」を後援したが、その中には本委員会委員による5講演が行われた。それらの内容の概要は、近日中に“月刊地球”に掲載予定である。

（4）本年10月14日～17日、東京大学山上会館において開催のシンポジウム「第四紀環境変動国際シンポジウム」でセッション“Late Quaternary sea-level change and coastal tectonics”（コンピナー；太田陽子・大村明雄・Kelvin Berryman）の開催が決まり、その実施に向け準備中である。

◎PAGES/PEP II 対応研究委員会

（委員長：小野有五）

（1）活動経過

1) 1996年8月5-7日、北京でのIGCにおけるPAGES-PEP IIの特別セッション「第四紀における東アジアのモンスーン変動」の開催に協力。

2) 1997年1月、東大海洋研で、PAGES-PEP IIに関わる重点領域研究「湖沼堆積物によるアジアモンスーンと地球環境変動の高精度復元」を立ち上げるためのシンポジウム「環境変動の共鳴箱としての湖沼・内湾堆積物」を開催。

3) 1997年3月、東京で日本学術会議のPAGES拡大委員会を開催、日本国内でのPAGES研究推進のための組織の再編成を行ない、PAGES-PEP II対応委員会として研究組織に参加。

学会からのお知らせ

- 4) 1997年5月, 地学雑誌 Vol.106, No.2 に特集号として「地球環境とヒマラヤ・チベット高原」を発行.
- 5) 1997年6月, 北京で PAGES-PEP II に関わる中国での研究計画「East Asian Continental Drilling Program」立ち上げのための香山コンファレンスに参加. 日本での研究成果と活動状況を報告した.

(2) 今後の予定

- 1) 1997年7月月刊地球よりシンポジウム特集号「環境変動の共鳴箱としての湖沼・内湾堆積物」を発行予定.
- 2) 1997年8月9日, 日本第四紀学会札幌大会(北大)において, シンポジウム「東アジアから西太平洋へー陸・海・ヒトのテレコネクションー」を開催予定. あわせて研究会を開催.
- 3) 1997年10月14-16日, 東大での国際シンポジウム「INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON QUATERNARY ENVIRONMENTAL CHANGE IN THE ASIA AND WESTERN PACIFIC REGION」において, PAGES-PEP II を中心とするセッション「High resolution and multi-proxy approaches of paleomonsoon changes in the eastern Asia」を開催予定.

◎アジア太平洋層序研究委員会

(委員長: 熊井久雄)

Subcommission on Quaternary Stratigraphy of Asia and Pacific Region は 1995 年のベルリン大会以降, 委員長が中国の Prof. Jiamao Han に代わって, 活発な動きが可能になったので, 国内委員会としての対応も以前より密になると思われる. 96 年の第四紀学会評議員会で承認されて以降, 本研究委員会は第四紀学会の研究委員会として活動するために, この Subcommission の国内委員を呼び掛け人として, 参加を呼び掛けたところ, 約 30 名の方々から参加の同意を得た. 第 1 年目の活動はこのような組織作りが主なものであった. 本格的な活動は 2 年目からになるが, その主たる計画は次のようなものである. 本研究委員会では, 昨年, 北京で開催された Subcommission のビジネスミーティングで策定された INQUA インターコングレスの研究計画にしたがって, 東アジアの南北(千島列島ー沿海州ー日本列島ー中国沿海部ーインドネシア), 東西(中国内陸部ー黄土高原ー中国平野部ー日本列島)の第四系精密対比の日本列島の部分を担当するほか, タイ(1997年), 日本(1998年), 中国(1999年)で計画されている国際シンポジウムの開催準備に重点をおき, そのための科研費の申請や研究とりまとめのための国内シンポを計画する.

研究集会のお知らせ

◆自然史学会連合第3回シンポジウム 動物たちの過去, 現在, 未来 —絶滅の動物学—

開催日時: 10月25日(土) 午後1時~5時

開催場所: 国立科学博物館分館講堂

[山手線新大久保駅または中央線大久保駅下車]

主催: 自然史学会連合

共催: 日本動物分類学会 国立科学博物館

プログラム:

1. 中生代の環境変動と恐竜などの大量絶滅
(平野弘道, 早稲田大学教育学部),
2. ズーストック計画—動物園における種保存計画から—
(中川志郎, 東京動物園協会),
3. アホウドリはよみがえるか
(長谷川博, 東邦大学理学部),
4. 地球規模で広がる海洋汚染—海の哺乳類からのメッセージ—
(宮崎信之, 東京大学海洋研究所大槌臨海研究センター),
5. 人類の起源と将来
(馬場悠男, 国立科学博物館人類研究部)

問い合わせ先:

国立科学博物館 武田正倫 03-3364-7123

推薦依頼

◆猿橋賞受賞候補者 及び 研究助成候補者の推薦依頼について

女性科学者に明るい未来をの会より, 下記の猿橋賞受賞候補者と研究助成候補者の推薦依頼がきています. 自薦・他薦等ありましたら, 規定の用紙(庶務幹事に請求下さい)に記入のうえ, 11月10日までに, 庶務幹事まで提出して下さい.

猿橋賞

対象: 自然科学の分野で, 顕著な研究業績を収めた女性科学者(50才未満)

表彰: 本賞は 賞状とし, 副賞として賞金30万円をそえる.

研究助成

対象: 海外のシンポジウム等に出席し, 論文を発表する女性研究者(40才未満)

助成金: 1件10万円とし, 年に数件.

連絡先: 〒192-03 八王子市南大沢1-1

東京都立大学理学部地理学教室 山崎晴雄

Tel.0426-77-2592, Fax.0426-77-2589

E-mail: yamazaki@mother.geog.metro-u.ac.jp

◆日本サンゴ礁学会設立大会のお知らせ

サンゴ礁は、種の多様性、水産資源や遺伝子資源の確保、さらには炭素循環との関わりなどの点から、科学のおよび社会的関心が近年益々高まっています。一方で、サンゴ礁に対する人為的な圧力は強まっており、その保全・管理・持続的な利用のための研究・モニタリングの必要性も高まっています。サンゴ礁に関する研究分野は、生物学、地質学、地理学、海洋物理学、化学、生化学、水産学、社会科学などきわめて多岐にわたっています。第四紀学においても、第四紀の環境変動とサンゴ礁の関係という視点から、サンゴ礁研究は活発に行なわれています。しかしながら、学際領域をつなぐ研究者のネットワークと研究の発表・議論の場は、これまでありませんでした。こうした点をふまえて、様々な分野の研究者が集まって、日本サンゴ礁学会設立準備委員会が発足しました。準備委員会では、昨年来10回に及ぶ会合を開き、日本サンゴ礁学会設立の意義と可能性について議論を重ねてきました。さらに、学会の設立について広く意見を求めるためにアンケート調査を実施しました。こうした結果に基づいて学会会則の原案を作成し、下記の通り設立大会を開催することを決定しました。これらの情報はニュースレターにまとめ、広く配布しています。本大会において会則の原案について議論してもらったのち、正式に学会が設立することになります。会則

原案では本会の目的を「サンゴ礁研究の発展に寄与するとともに、学際的知識の進歩およびその普及を図ること（会則第2条）」としました。この趣旨に賛同される方のご参加を期待しております。ご関心をお持ちの方は、末尾の準備委員会事務局にお問い合わせ下さい。ニュースレターをお送りいたします。

記

1. 期日：平成9年11月2日（日）～3日（月）
2. 会場：琉球大学教育学部
（〒903-01 沖縄県中頭郡西原町字千原1番地）
3. 日程
11月2日 総会、シンポジウム、一般講演、懇親会
11月3日 一般講演
なお11月1日（土）14時から17時には、沖縄都ホテルで、日本サンゴ礁学会設立記念公開講演会を開催します。
4. 問い合わせ先：
大会に関する問い合わせ：
琉球大学理学部海洋自然科学科 日高道雄
TEL: 098-895-8547 FAX: 098-895-5376
e-mail: hidaka@sci.u-ryukyu.ac.jp
学会全般に関する問い合わせ：
日本サンゴ礁学会準備委員会事務局
113 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学・理・地理 茅根 創
FAX: 03-3814-6358; TEL: 03-3812-2111 (ex4573)
e-mail: kayanne@geogr.s.u-tokyo.ac.jp

◆地底の森ミュージアム開館の御案内

仙台市の富沢遺跡は1982年に発見され、その後の調査で弥生～近世の水田跡が何層にもわたって広がっていることが明らかになった。第30次発掘調査（1988）では地表下5mから後期旧石器時代（20ka）の針葉樹を主とする湿地林の跡と人類・動物の活動の痕跡が発見された（仙台市教育委員会、1989：第四紀研究，28，p. 293-301）。同年度大会を仙台で開催した第四紀学会はこの遺跡の保存についての要望書を仙台市に提出した。

1990年に仙台市教育委員会はノボシビルスクにおけるINQUA主催のアジア・アメリカの旧石器年代層位学に関する国際討論会に富沢遺跡の調査・研究結果を提出し、討論に参加した。仙台市は第30次調査対象地区15,000㎡の保存と活用を決め、予定の小学校建設用地を遺跡外に移し、発掘したままの状態に遺跡を保存・展示することとした。しかし、この旧石器遺跡面は地下水面以下であったため、遺物の保存処理方法と展示館の建設工法の検討には数年間を要した。結局、珪素化合物（ポリシロキサン）による保存処理と床のない特殊な建築工法をとること

になり、1994年10月着工、1996年11月に博物館施設として開館した。敷地面積は14,263㎡、建物はRC造りで地上1階・地下1階の楕円筒形、延床面積は2,743㎡である。

展示：入口は地下、常設展示1（地下展示室：900㎡）：発掘されたままの2万年前の林の跡（針葉樹を主とする約100本の樹幹と根、鹿の糞、人間の野営の跡、石器）、2万年前の世界のイメージ映像（20分サイクルで繰り返し）、常設展示2（1階展示室：300㎡）：発掘調査の成果の解説、屋外：氷河期の森〔寒冷地より移植した針葉樹間の散策路〕

地底の森ミュージアム tel, 022-245-9153
正式名称：仙台市富沢遺跡保存館
所在地：仙台市太白区長町南4-3-1
交通：JR長町駅から地下鉄（富沢行き）で10分長町南駅下車徒歩5分；JR長町駅から徒歩10分
開館：午前9時～午後4時45分
休館：月曜日・毎月月末・年末年始
入館料：一般400円、高校生200円、小中学生100円

◆評議員会議事録 (1997年度第1回)

日時: 1997年8月5日(火) 16:00~18:30

場所: 北海道大学 地球環境科学研究科 会議室

議長: 小泉 格

出席者: 米倉伸之(会長), 太田陽子(副会長), 赤羽貞幸, 海津正倫, 遠藤邦彦, 大村明雄, 奥村晃史, 小野 昭, 小野有五, 菊地隆男, 小泉 格, 斎藤文紀, 坂上寛一, 杉山雄一, 竹村恵二, 陶野郁雄, 福沢仁之, 町田 洋, 松浦秀治, 真野勝友, 山崎晴雄, 吉川周作(以上評議員), 鎮西清高(会長経験者), 小池裕子, 斉藤享治, 松島義章(オブザーバー), 委任状18通

I 報告事項

1. 1996年度事業報告

1-1. 庶務

- (1) 会員動向(1997年7月31日現在): 正会員1855名(うち, 学生会費会員148名, 海外会員22名を含む), 賛助会員15社(16口), 団体購読会員101団体(106口)。逝去会員は, 阿部宗明, 今村外治, 上田哲郎, 大参義一, 佐々木清一, 仁科良夫, 藤井 治, 松井 愈, 山中三男の9氏。
- (2) 1996年度第2回評議員会を1997年1月25日に日本大学会館で開催した。出席者20名, 委任状13通。議長: 陶野郁雄。
- (3) 以下のシンポジウム・講演会等の協賛および後援を行った:
 - ・第12回ESR応用計測研究会(1996.9.14-15.: ESR応用計測研究会)
 - ・海洋調査技術学会第8回研究成果発表会(1996.11.14-15.: 海洋調査技術学会)
 - ・第4回アジア学術会議-科学者フォーラム(1997.2.3-7.: 日本学術会議)
 - ・第四紀の海岸環境・大陸棚に関する国内シンポジウム(1997.2.15.: IGBP国内委員会・シンポジウム実行委員会)
 - ・世界古代湖会議(1997.6.21-29. 世界古代湖会議実行委員会)
 - ・シンポジウム「地盤・水環境と気候変動」(1997.7.11.: 地下水技術協会)
 - ・アジア・西太平洋地域における第四紀環境変動に関する国際シンポジウム(1997.10.14-17.: 第四紀環境変動国際シンポジウム実行委員会)
 - ・第3回地球古水文環境変動(INQUA/GLOCOPH)国際会議(1998.9.4-11.: 第3回地球古水文環境変動国際会議実行委員会)
- (4) 以下の研究委員会が活動した:
 - テフラ研究委員会(委員長: 町田 洋), INQUA/GLOCOPH対応研究委員会(委員長: 門村 浩), 海岸線研究委員会(委員長: 大村明雄), PAGES-PEP II対応研究委員会(委員長: 小野有五), アジア太平洋層序研究委員会(委員長: 熊井久雄)
- (5) 論文賞受賞候補者選考委員会(太田陽子委員長, 小池一之, 香原志勢, 永塚鎮男, 羽鳥謙三各委員)の運営を担当した。
- (6) 選挙管理委員会(水野清秀委員長, 叶内敦子, 久保純子, 福沢仁之, 宮内崇裕, 山本憲志郎各委員)の運営を担当した。
- (7) 1997年度文部省科学研究費学術刊行物補助金の申請を行った(採択されず)。

(8) 第17期日本学術会議会員の候補者と推薦人を評議員の投票で決めた。

(9) 地質科学関係学協会連絡協議会・地球環境科学関連学会協議会の設立準備会に出席し, 対応を検討した。

1-2. 編集

- (1) 「第四紀研究」35巻4号(原著論文4編, 短報3編, 68頁), 5号(原著論文2編, 短報2編, 資料1編, 58頁), 36巻1号(原著論文4編, 短報1編, 72頁), 2号(原著論文5編, 雑録, 74頁)を編集・刊行した。また, 入会案内と入会手続きカードを36巻2号に入れた。36巻3号(原著論文4編, 短報1編)は印刷中である。すでに受理している論文は原著論文2編と短報1編で, 36巻4号に掲載する予定である。審査中の論文は18編(原著論文17編, 短報1編)である。なお, 1996年日本第四紀学会のシンポジウム特集号「最終氷期の終焉と縄文文化の成立・展開」(編集委員長: 米倉伸之)は, 36巻5号に掲載予定である。
- (2) 第四紀研究への投稿論文が少ないことから, 5つの研究委員会に原稿依頼を行った。
- (3) 第四紀研究のA4判化(文字の大きさ・文字数・図表の大きさ, 印刷・発送費・頁数の変化など)を検討した。
- (4) 投稿規定・執筆要領(欧文要旨の語数, キャプションの和・英併記, 引用文献など)を検討した。

1-3. 行事

- (1) 1996年度大会(総会・公開シンポジウム・一般研究発表・懇親会)を東京大学において1996年8月22~24日に開催した。22, 23日は東京大学山の上会館にて, 一般研究発表(口頭発表64件, ポスターセッション14件), 総会, および懇親会を行った。24日は東京大学大講堂(安田講堂)で第四紀学会創立40周年記念公開シンポジウム「最終氷期の終焉と縄文文化の成立・展開」(オーガナイザー: 米倉伸之・辻 誠一郎・岡村道雄, 話題提供10件)を実施し, 会員および非会員多数が参加した。
- (2) 日本第四紀学会講演会「加速器質量分析法による放射性炭素年代測定の最近の動向」(講演者: 中村俊夫[名古屋大学年代測定資料研究センター])を1997年1月25日午後, 東京九段の日本大学会館で開催した。
- (3) 第3回博物館見学会を1997年2月15日午後, 神奈川県相模原市の相模原市立博物館にて開催した。案内者: 金井憲一(相模原市立博物館), 町田 洋(都立大名誉教授)
- (4) 1997年地球惑星科学関連学会合同大会(名古屋大学, 3月25~28日)において, 日本第四紀学会固有セッション(シンポジウム及び一般講演)を開催した。シンポジウムは3月26日午前に「地球規模変動に対する熱帯海岸環境の対応と戦略」(オーガナイザー: 海津正倫・茅根 創, 話題提供: 招待講演7件)を行った。一般研究発表は同日全てポスターセッションにて行われた。発表件数24件。
- (5) 1997年度日本第四紀学会大会・総会・シンポジウム・巡検等の準備を行った。大会は1997年8月4~10日に北海道大学で行われる。プレ巡検, 一般研究発表(口頭およびポスター), シンポジウム, 総会, 懇親会, ポスト巡検が行われる。シンポジウムのテーマは「東アジアから西太平洋へ: 陸・海・ヒトのテレコネクション」(オーガナイザー: 小泉 格・大場忠道・小野有五)である。
- (6) 1998年度第四紀学会の会場選定を行い, 1998年8月下旬~9月上旬に小田原市の神奈川県立生命の星・

地球博物館で実施することに決定した。

1-4. 企画

- (1) 第4回第四紀学会講習会を1997年5月17日～18日に、テーマ「遺跡の環境と生業の復元Ⅰ 植物遺体群を調べる」(講師：鈴木三男・南木睦彦・岡田康弘・辻誠一郎)で、青森県津軽平野および青森県三内丸山遺跡体験学習館で開催した。第1日目はバス巡検(津軽平野の最終氷期・後氷期の泥炭層・埋没林など)、第2日目は三内丸山遺跡見学と体験学習館にて木材・大型植物遺体群実習を行った。約50人が参加した。
- (2) 第5回講習会を10月18日～19日に、テーマ「遺跡の環境と生業の復元Ⅱ 動物遺体群を調べる」(講師：西本豊弘・樋泉岳二)で、青森県三内丸山遺跡体験学習館で開催する準備をした。

1-5. 会報

- (1) 「第四紀通信(QR Newsletter)」Vol.3-5(1996年9月)、Vol.3-6(96年11月)、Vol.4-1(97年1月)、Vol.4-2(97年3月)、Vol.4-3(97年6月)、Vol.4-4(97年7月)を刊行した。
- (2) ホームページ開設にあたり、広報検討委員会(会報・庶務・行事・企画幹事と奥村晃史会報委員)で検討した。
- (3) 文部省学術情報センターのインターネットWWWサーバによる日本第四紀学会のホームページを作成した。アドレスは、<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/qr/>

1-6. 渉外

- (1) 自然史学会連合の第3回定期総会が1996年10月26日に開催された。科研費「自然史科学」(時限付き)の審査委員候補は、分野ごとに交代することが了解された。シンポジウムの安定開催のため、来年度から各学会の負担金を2万円とすることが承認された。
- (2) 「地球惑星関連学会」1997年の合同大会が名古屋大学東山キャンパスで3月25～28日にかけて開催された。合同大会事務局からの要請にもとづき、プログラム集を本会会員へ郵送するため、会員名簿の修正最新版を作成し送付した。
- (3) 「第四紀露頭集」の販売促進のため、考古学関連の学会へ広告を掲載することとし、日本考古学協会と考古学研究会の会誌を候補にあげた。日本考古学協会第63回総会(1997年5月24・25日)の研究発表要旨には、半頁の広告を掲載した。

2. 1996年度決算報告・会計監査報告

別添資料に基づき、松浦秀治会計幹事より決算報告があった。1996年度については、1997年度大会が8月上旬に開催されたため、会計上6月末で締め、7月分を1997年度に回した。しかし、額が大きく変化することはなく、大きく違ってくる科目は、会費収入が7月分として例年30万円程度見込まれることと、会誌発送費支出として36巻2号分の約150万円あることである。そのような含みのあるなかで、前期繰越金は266万円であったのに対し、次期繰越金が130万円という赤字決算となっている。

引き続き、松島義章会計監査より予算の執行、帳簿・証券の整理等、正常適正に処理されている旨、監査報告があった。さらに、以下の付帯文が読み上げられた。「今年度の136万円の赤字の主な原因は、露頭集の売上げおよび雑収入が、当初見込みよりも約200万円少なかったことにありますが、これは1993年度の会費値上げ以降多くの新規事業が行われ、学会活動の拡大・活発化に伴って年毎に支出が拡大していることも一因と思われます。その活動に伴う支出の裏付けを次期繰越

金で埋め合わせしてきましたが、この状態では限りがあり、本会の財政状態は急速に悪化していると言わざるを得ません。これに対する早急な対策が必要と考えます。」

3. 研究委員会報告

本号の研究委員会1996年度活動報告を参照。

4. 日本学術会議・第四紀研連報告

米倉伸之第四紀研連委員長より、16期の活動報告があった。

- (1) 16期研究連絡委員会の任期は1994年10月21日から1997年10月20日までであるが、この間、委員会を11回開催した。その議事録は第四紀通信に掲載した。
- (2) 第14回国際第四紀学連合(1995年8月、ベルリン)に代表(米倉伸之委員長)を日本学術会議から派遣し、国際第四紀学連合副会長に太田陽子委員を、名誉会員に渡辺直経氏を推薦し、受理された。また、国際第四紀学連合の分担金を1996年度から4650スイスフランから6560スイスフランに増額した。それでも、さらに分担金の増額が要求されている。
- (3) 国立大学地質学系教室における第四紀研究関係の講義の開設状況について、立石委員を中心に調査を行った。
- (4) 日本学術会議第1常置委員会から提言のあった研究連絡委員会の見直し案について検討し、第四紀研究連絡委員会としての見解を関係研究連絡委員会などに送付した。見直しについては、17期の引き継ぎ事項となった。引き続き、太田陽子INQUA副会長より、以下の要請があった。

- (1) 1999年に南アフリカのダーバンで開催される第15回INQUA大会に積極的に参加して欲しい。
- (2) アジアのINQUA加盟国は、現在、日本、中国、韓国だけなので、加盟国を増やしたい。加盟する可能性のある国のコンタクトを取るべき人などの情報を寄せて欲しい。

5. 学会論文賞の報告

太田陽子委員長(論文賞受賞候補者選考委員会)から、選考経過と結果の報告があった(受賞者、授賞理由については、別途報告)。

II 審議事項

1. 会長推薦幹事の委嘱について

会則第9・10条に基づき、会長推薦幹事として斎藤文紀・中村俊夫・吉川周作会員が承認された。

2. 1997年度事業計画

2-1. 庶務

- (1) 内規集の整備を進める。
- (2) 学会受け入れ図書 of 整理を進める。
- (3) 1997年度において活動を希望する研究委員会を内定し評議員会に諮る(テフラ研究委員会、INQUA/GLCOPH対応研究委員会、海岸線研究委員会、PAGES-PEP II 対応委員会、アジア太平洋層序研究委員会の継続が承認された)。
- (4) 論文賞受賞者選考委員会を組織し、その運営を担当する。
- (5) 1998年度文部省科学研究費学術刊行物補助金の申請を行う。
- (6) 日本学術会議第17期第四紀研究連絡委員会委員候補者を評議員の投票で決める。

2-2. 編集

学会報告

- (1)「第四紀研究」36巻4号, 5号, 37巻1号, 2号, 3号を編集・刊行する。
- (2)1997年度大会シンポジウム「東アジアから西太平洋へー陸・海・ヒトのテレコネクション」を中心とする特集号の編集委員会を設置し, 企画・編集にあたる。
- (3)第四紀研究への論文・欧文論文投稿が増加する方法を検討し, 第四紀研究の内容の充実を計る。
- (4)第四紀研究の投稿規定・執筆要領などの改訂を検討する。

2-3. 行事

- (1)1997年度日本第四紀学会大会を北海道大学で開催する。
- (2)1998年5月に国立オリンピック記念青少年総合センターで行われる地球惑星科学関連学会に参加するためその準備を行う。
- (3)1998年度大会の準備を行う。大会は98年8月下旬または9月上旬頃, 小田原市の神奈川県立生命の星・地球博物館において開催する。
- (4)1999年度大会の開催地を選定する。

2-4. 企画

- (1)1998年2月14日の評議員会の開催時, 喜界島のサンゴ礁段丘に関するシンポジウム(オーガナイザー:太田陽子・大村明雄・中森 亨)を開催する予定である。
- (2)第四紀研連, 研究委員会, 他学会・他研連, 地域博物館等と協力して, ミニシンポジウム, 講演会, 講習会, 見学会等を企画する。

2-5. 広報

- (1)文部省学術情報センターの学協会インターネットサーバーに開設した日本第四紀学会ホームページの充実を計る。
- (2)「第四紀通信」Vol.4-5・6(1997年9・11月), Vol.5-1・2・3・4(1998年1・3・5・7月)を刊行し, 紙面の充実を計る。

2-6. 渉外

地球惑星科学関連学会・自然史学会連合・地球環境科学関連学会協議会等との対応を図る。

3. 1997年度予算案

別添資料参照

以上の1997年度事業計画・予算案が承認された。

4. 学会賞規定・内規の改正について

以下の学会賞規定・内規の改正が承認された。

4-1 学会賞規定の改正

[現行]

第4条 日本第四紀学会論文賞受賞候補者を選考するため, 論文賞受賞候補者選考委員会(以下「選考委員会」と略称する)をおく。

第5条 選考委員会は, 会長が推薦し, 評議員会が承認した5名の論文賞選考委員(以下「選考委員」と略称する)で構成し, 選考委員の互選により選考委員長をおく。選考委員の任期は1年とし, 連続して2期を超えて選考委員に就任することはできない。

[改正案]

第4条 日本第四紀学会論文賞受賞候補者を選考するため, 論文賞受賞者選考委員会(以下「選考委員会」と略称する)をおく。

第5条 選考委員会は, 評議員の投票により選出された5名の論文賞選考委員(以下「選考委員」と略称する)で構成し, 選考委員の互選により選考委員長をおく。選考委員の任期は1年とし, 連続して選考委員に就任することはできない。

4-2 論文賞選考に関する内規の改正

[現行]

4. 選考委員は評議員会で承認を得る。

6. 選考委員に欠員が生じた場合は, 会長が委員の構成を考慮して後任の委員を指名する。

[改正案]

4. 選考委員は, 会長が専門分野を付記して推薦した10名以上の正会員のなかから, 評議員の投票により選出される。得票数が同数のときは, 専門分野の委員数が少ない者を委員とする。専門分野の委員数も同数の場合は, 年長順とする。

6. 選考委員に欠員が生じた場合は, 次点者を補充する。

5. 機関誌・財政等検討委員会の設置について

機関誌・財政等のあり方を総合的に検討するための機関誌・財政等検討委員会の設置を提案し, 承認された。

6. 地球環境科学関連学会協議会への参加について
地球環境研究を円滑に発展させるために, 関連の諸学会間の実りある交流を生み出す機関としての地球環境科学関連学会協議会に参加することを提案し, 承認された。

7. 名誉会員の評議員会の出席について

会長経験者に対して, 名誉会員であっても評議員会の案内をだしていたが, 名誉会員の意見もふまえ, 今後, 名誉会員については案内をださないこととした。

III その他

次期繰越金からみると赤字会計なので, その解消のためにも, 大会参加費を徴収すべきではとの意見がだされ, 幹事会で検討することになった。

IV 日本第四紀学会1997～1998年度役員名簿

(1997年8月1日～1999年7月31日)

会長 米倉伸之

副会長 太田陽子

会計監査 遠藤邦彦, 坂上寛一

評議員

共通分野 上杉 陽, 遠藤邦彦, 太田陽子, 松田時彦, 米倉伸之

地質学分野 赤羽貞幸, 新井房夫, 菊地隆男, 斎藤文紀, 酒井潤一, 杉山雄一, 竹村恵二, 福沢仁之, 増田富士雄, 吉川周作

地理学分野 池田安隆, 海津正倫, 岡田篤正, 奥村晃史, 小野有五, 町田 洋, 山崎晴雄

古生物学分野 糸魚川淳二, 小泉 格, 辻 誠一郎, 真野勝友

動物学分野 土 隆一, 宮武頼夫

植物学分野 鈴木三男, 松下まり子

土壌学分野 加藤芳朗, 坂上寛一

人類学分野 赤沢 威, 松浦秀治

考古学分野 麻生 優, 小田静夫, 小野 昭, 織笠 昭

地球物理学分野 石橋克彦, 徳永英二

地球化学分野 大村明雄, 中村俊夫

工学分野 桑原 徹, 陶野郁雄

幹事 真野勝友(幹事長), 山崎晴雄(庶務),

松浦秀治(会計), 小野 昭(編集), 吉川周作(編集), 奥村晃史(広報), 斎藤文紀(行事), 辻 誠一郎(企画), 中村俊夫(渉外)

編集委員 小野 昭(幹事), 吉川周作(幹事),

清水丈太, 鈴木毅彦, 福沢仁之, 松原彰子, 水野清秀,

御堂島 正, 宮内崇裕, 渡邊真紀子(以上, 委員),

綿引裕子(編集書記)

広報委員 奥村晃史(幹事), 後藤秀昭

◆総会議事録（1997年度）

I 報告事項

1. 新幹事紹介

真野勝友幹事長より、1997～1998年度の会長・副会長・会計監査・幹事、および幹事の役割分担が紹介された（評議員会議事録参照）。

2. 1996年度事業報告

真野幹事長より、評議員会議事録（1997年度）にある報告事項の報告があった。

3. 1996年度決算報告・会計監査報告

松浦秀治会計幹事より決算報告があり、引き続き、菊地隆男会計監査より会計監査報告があった。

4. 論文賞選考過程報告

太田陽子論文賞授賞候補者選考委員会委員長より、選考経過と結果の報告があった。

5. 機関誌・財政等検討委員会の設置について

真野幹事長より、評議員会で承認された機関誌・財政等検討委員会の設置について報告があった。

6. 日本学術会議・第四紀研連報告

米倉伸之第四紀研連委員長より、評議員会議事録にあ

る報告事項の報告があった。

II 審議事項

1. 1997年度事業計画

真野幹事長より、評議員会議事録にある事業計画の説明があり、承認された。

2. 1997年度予算案

松浦会計幹事より、評議員会議事録にある予算案の説明があり、承認された。

III その他

財政状況の逼迫に関連して、今年度作成予定の名簿は1年遅れてもよいのではとの意見がだされ、幹事会で検討することとなった。A4判化についても現時点で無理する必要がないのではとの意見に対しては、機関誌・財政等検討委員会で検討することとした。さらに、第四紀研究に対する文部省科研費助成金をもらえるよう努力して欲しいとの要請もだされ、幹事会で努力する旨、返答があった。また、第四紀研究に投稿したが長期間何の音沙汰も無かった旨、発言があったのに対し、前編集幹事から事情説明があり、今後そのようなことがないよう改善する旨、返答があった。

資料（2）貸借対照表

（1997年7月31日現在）（単位：円）

借方		貸方	
科目	金額	科目	金額
流動資産		流動負債	
預け金	3,198,957	未払費用	2,571,002
小口現金	307,114	前受会費	8,883,000
立替金	8,342	積立金	4,950,000
普通預金	28,781	小計	16,404,002
定期預金	4,950,000	前期繰越金	2,664,101
金銭信託	7,210,000	当年度剰余金	△1,364,909
貸付信託	2,000,000	(次期繰越金)計	1,299,192
合計	17,703,194	合計	17,703,194

財産目録

資産の部（1997年7月31日現在）（単位：円）

科目	摘要	金額
預け金	財団法人日本学会事務センター	3,198,957
小口現金	編集 307,114	307,114
普通預金	三井信託/上野	28,781
定期預金	三井信託/上野	4,950,000
金銭信託	三井信託/上野	7,210,000
貸付信託	三井信託/上野	2,000,000
立替金	別刷代 Vol. 34-2, Vol. 34-3	8,342
合計		17,703,194

負債の部（単位：円）

科目	摘要	金額
未払費用	会誌36-1印刷代	1,071,380
	会誌36-2印刷代	1,129,460
	会報4-3印刷代	101,745
	発送郵税	167,610
	会報2-5印刷代	99,807
	会計幹事立替分	1,000
前受会費	1997年度会費	8,883,000
積立金	1NQUA積立	900,000
	予備費積立	3,250,000
	名簿作成積立	800,000
合計		16,404,002

資料（4）日本第四紀学会1996年度業務委託費

（1996年8月1日～1997年7月31日）

I 会員業務費用	3,039,105	
1. 会員管理費	180,000	
2. 会費請求・学会誌等		
送付費用（11回）	2,328,780	(2098件×1110円)
3. 新入会員登録手数料	72,800	(104件×700円)
4. 住所等変更手数料	138,000	(230件×600円)
5. 特別請求書発行手数料	159,200	(101件×1200円)
		(38件×1000円)
6. 追加発送手数料	50,800	(508件×100円)
7. 多部発送手数料	1,525	(5件×305円)
8. 学会誌保管費用	108,000	(18,000円×6段)
II 受付業務費用	320,000	
III 会計業務費用	468,000	
消費税負担額		
会員業務	3,039,105円×8/12×3%	60,782
受付・会計業務	3,039,105円×4/12×5%	50,651
	(320,000+468,000)円×3%	23,640
消費税合計額	135,073	
合計	3,962,178	

資料（5）日本第四紀学会1997年度業務委託費見積

（1997年8月1日～1998年7月31日）

I 会員業務費用	3,019,725	
1. 会員管理費	180,000	
2. 会費請求・学会誌等		
送付費用（11回）	2,331,000	(2100件×1110円)
3. 新入会員登録手数料	70,000	(100件×700円)
4. 住所等変更手数料	120,000	(200件×600円)
5. 特別請求書発行手数料	159,200	(101件×1200円)
		(38件×1000円)
6. 追加発送手数料	50,000	(500件×100円)
7. 多部発送手数料	1,525	(5件×305円)
8. 学会誌保管費用	108,000	(18,000円×6段)
II 受付業務費用	320,000	
III 会計業務費用	468,000	
消費税5%	190,386	
合計	3,998,111	

資料(1) 1996年度収支決算報告書

(1996年8月1日～1997年7月31日)

収入の部

(単位：円)

科目	予算額	決算額	増減	備考
会費	13,339,850	13,330,280	△ 9,570	
└正会員	12,020,350	12,006,700		海外会費 112,700円
内訳┆団体会員	959,500	963,580		過年度分 414,000円
└賛助会員	360,000	360,000		
誌代	6,900,000	5,865,033	△ 1,034,967	露頭集・要旨集売上、Back No.、等
補助金収入	0	0	0	文部省科研費助成金
雑収入	1,000,000	365,623	△ 634,377	広告料、別刷代、JICST、等
利子収入	200,000	55,658	△ 144,342	
役員選挙積立金取崩	400,000	400,000	0	1996年度予算額
名簿積立金取崩	0	0	0	
特別事業積立金取崩	500,000	500,000	0	1996年度予算額
INQUA積立金取崩	0	0	0	
収入合計	22,339,850	20,516,594	△ 1,823,256	
前期繰越金	2,664,101	2,664,101		
合計	25,003,951	23,180,695	△ 1,823,256	

支出の部

(単位：円)

科目	予算額	決算額	増減	備考
会誌発行費	7,900,000	7,955,934	△ 55,934	第四紀研究5冊 391p
└印刷費	6,000,000	6,070,850		35巻3号～36巻2号
内訳┆編集費	1,700,000	1,605,194		
└別刷印刷費	200,000	279,890		
会誌送費	700,000	530,920	169,080	35巻3号～36巻1号分(4冊)
会報発行費	650,000	610,513	39,487	第四紀通信6号 92p
会報送費	1,000,000	1,020,600	△ 20,600	3巻4号～4巻3号
大会運営準備金	400,000	400,000	0	1997年用(北海道大学大会事務局)
巡検準備金	100,000	100,000	0	1997年用(北海道大学大会事務局)
特別講演会費	500,000	525,666	△ 25,666	
予稿集印刷費	800,000	690,100	109,900	講演要旨集1000部
学会賞費	250,000	159,908	90,092	
第四紀学会講習会費	100,000	79,960	20,040	
通信費	450,000	648,837	△ 198,837	会費請求書発送郵税、合同大会プログラム
会議費	50,000	17,050	32,950	発送費、等
旅費・交通費	200,000	331,220	131,220	
印刷費	100,000	202,833	△ 102,833	評議員会・総会資料印刷、入会申込書印刷等
業務委託費	3,850,000	3,962,178	△ 112,178	資料(4)参照
特別刊行物企画印刷費	2,100,000	2,107,071	△ 7,071	露頭集印刷3000部
特別刊行物企画編集費	2,200,000	900,000	1,300,000	露頭集編集費
INQUA対策費	0	0	0	
役員選挙費	400,000	604,335	△ 204,335	
名簿作成費	0	0	0	
名簿発送費	0	0	0	
特別事業積立金	0	0	0	
INQUA対策積立金	100,000	100,000	0	1996年度予算額計上
役員選挙費積立金	200,000	200,000	0	1996年度予算額計上
予備費積立金	0	0	0	
名簿作成積立金	400,000	400,000	0	1996年度予算額計上
研究委員会助成金	200,000	80,000	120,000	40,000円×2件
雑費	100,000	254,378	△ 154,378	露頭集関係、各案内発送手数料、等
予備費	100,000	0	100,000	
支出合計	22,850,000	21,881,503	968,497	
次期繰越金	2,153,951	1,299,192	854,759	
合計	25,003,951	23,180,695	1,823,256	

資料(3) 1997年度予算案

(1997年8月1日～1998年7月31日)

収入の部

(単位:円)

科目	1997年予算案	1996年決算額	1996年予算案	備考
会費	13,381,550	13,330,280	13,339,850	(7000円×1707名+5000円×148名)×95%
┆正会員	12,054,550	12,006,700	12,020,350	
内訳┆団体会員	1,007,000	963,580	959,500	10,000円×106口×95%
┆賛助会員	320,000	360,000	360,000	20,000円×16口
誌代	4,000,000	5,865,033	6,900,000	露頭集売上含む
補助金収入	0	0	0	文部省科研費助成金
雑収入	1,000,000	365,623	1,000,000	広告料, 印税, 許諾抄録料等
利子収入	50,000	55,658	200,000	
役員選挙積立金取崩	0	400,000	400,000	
名簿積立金取崩	800,000	0	0	
特別事業積立金取崩	0	500,000	500,000	
INQUA積立金取崩	0	0	0	
収入合計	19,231,550	20,516,594	22,339,850	
前期繰越金	1,299,192	2,664,101	2,664,101	
合計	20,530,742	23,180,695	25,003,951	

支出の部

(単位:円)

科目	1997年予算案	1996年決算額	1996年予算案	備考
会誌発行費	7,900,000	7,955,934	7,900,000	第四紀研究5冊
┆印刷費	6,000,000	6,070,850	6,000,000	36巻3号～37巻2号
内訳┆編集費	1,700,000	1,605,194	1,700,000	
┆別刷印刷費	200,000	279,890	200,000	
会誌発送費	800,000	530,920	700,000	36巻2号+36巻3号～37巻2号
会報発行費	620,000	610,513	650,000	第四紀通信6通4巻4号～5巻3号
会報発送費	1,030,000	1,020,600	1,000,000	
大会運営準備金	400,000	400,000	400,000	1998年用
巡検準備金	100,000	100,000	100,000	1998年用
特別講演会費	300,000	525,666	500,000	
予稿集印刷費	500,000	690,100	800,000	
学会賞費	200,000	159,908	250,000	
第四紀学会講習会費	100,000	79,960	100,000	
通信費	700,000	648,837	450,000	会費請求書発送郵税、事務通信費等
会議費	50,000	17,050	50,000	
旅費・交通費	300,000	331,220	200,000	
印刷費	100,000	202,833	100,000	評議員会・総会資料印刷、コヒ一代等
業務委託費	4,000,000	3,962,178	3,850,000	資料(5)参照
特別刊行物企画印刷費	0	2,107,071	2,100,000	
特別刊行物企画編集費	650,000	900,000	2,200,000	露頭集編集費未払分
INQUA対策費	0	0	0	
役員選挙費	0	604,335	400,000	
名簿作成費	1,200,000	0	0	
名簿発送費	450,000	0	0	
特別事業積立金	0	0	0	
INQUA対策積立金	100,000	100,000	100,000	
役員選挙費積立金	200,000	200,000	200,000	
予備費積立金	0	0	0	
名簿作成積立金	0	400,000	400,000	
研究委員会助成金	80,000	80,000	200,000	40,000円×2件
雑費	100,000	254,378	100,000	
予備費	100,000	0	100,000	
支出合計	19,980,000	21,881,503	22,850,000	
次期繰越金	550,742	1,299,192	2,153,951	
合計	20,530,742	23,180,695	25,003,951	

◆第13回(新旧第2回合同)幹事会議事録

日時:1997年7月19日(土) 13:30~17:30

場所:東京大学 理学部5号館 地質学教室

出席:鎮西清高(会長),米倉伸之(次期会長),
太田陽子(次期副会長),坂上寛一,岡田篤正,
奥村晃史,小野 昭,小池裕子,杉山雄一,
辻 誠一郎,松浦秀治,真野勝友,山崎晴雄,
斉藤享治(以上,新旧幹事)

1. 次期委員会の体制について

編集委員会および広報委員会の委員について検討した。なお,従来,第四紀通信担当の幹事・委員会を会報幹事・委員会としてきたが,ホームページの維持・管理の役割も含まれているので,今後,広報幹事・委員会と呼ぶこととした。

2. 庶務

(1)内規集を作成した。

(2)第3回論文賞選考委員会が6月29日に開催され,受賞者を決定し,授賞理由・答申を作成した。なお,現行の論文賞には奨励賞的な意味合いを含んでいるが,委員が共通の認識のもとで選考するために,年齢制限のない論文賞と年齢制限のある奨励賞を学会賞規定に盛り込む旨,要望書が出されている。この要望については,次期執行部で検討することとした。

(3)5つの研究委員会から,1996年度の活動報告および1997年度の継続希望が出されたので,評議員会に諮ることとした。新規の研究委員会の開設希望はなかった。

(4)評議員会に参加を諮る地球環境科学関連学会協議会の委員を1~2名出すよう要請文が届いた。人選については次期執行部で行うこととした。

(5)広く地理学関連の多くの学会の連携をはかり,地理学あるいは地理思想の振興と普及の活動を行うことを目的とした,地理学協会連合(仮称)準備会参加の要請文が届いた。参加するかどうかを含めて,次期執行部で検討することとした。

3. 会計

(1)1996年度決算の説明があった。当初予算でも51万円の赤字を見込んでいたが,136万円の赤字となった。赤字の主な原因は,露頭集の売り上げと雑収入が当初見込みよりも少なかったことであるが,学会活動の拡大・活発化に伴って,年毎に支出が増大していることも一因である。なお,会費収入は,値上げ後の93年度以降,会員数が横這い(学生会員は増え,一般会員は減少)のため,ほとんど増えていない。今後,増大する支出をいかに切り詰めるか,収入をいかに着実に伸ばすか,早急に検討する必要がある。

(2)1997年度予算案の説明があった。全体的に,40周年記念の昨年度に比べて,緊縮型とした。収入については,会費収入は前年並みを見込んでいる。露頭集に関しては,昨年度よりも少なく見込んでいるが,それでも周辺関連分野への売り込みを積極的に図らないと,目標達成できない恐れがある。支出については,各科目とも,前年度,前々年度の実績に基づいて,できるだけ切り詰めた。収入の合計は1920万円,前年度繰越金は130万円なのに対し,支出合計は2000万円程の赤字が見込まれ,繰越金は50万円に減少する予算案となっている。

4. 編集

(1)第四紀研究36巻3号(原著論文4篇,短報1編)が印

刷中である。

(2)36巻4号までは旧編集委員会が,特集号の5号から新編集委員会が編集することとした。

5. 行事

(1)1997年学術大会の第4報(大会プログラム)を第四紀通信4巻4号に掲載した。

(2)大会のポスト巡検は,参加者少数のため中止となった。

(3)地球惑星科学関連学会の合同大会の業務が2年前から行事担当に加わったための負担軽減として,第2回評議員会時に開催していた特別講演会・シンポジウム,および随時開催するミニシンポジウム,講演会,見学会の企画を企画担当に移すこととした。

6. 会報

(1)第四紀通信4巻4号を発送手配中である。

(2)ホームページ用に「第四紀とは」「第四紀研究(第四紀学)とは」を作成した。

7. 企画

(1)第5回講習会を10月18~19日に,テーマ「遺跡の環境と生業の復元Ⅱ 動物遺体群を調べる」(講師:西本豊弘・樋泉岳二)で,青森県三内丸山遺跡体験学習館で開催する。

(2)1998年2月14日(予定)の評議員会時に,喜界島のサンゴ礁段丘に関するシンポジウム(オーガナイザー:太田陽子・大村明雄・中森 亨)を開催する予定である。

8. 渉外

現在参加している地球惑星科学関連学会・自然史学会連合のほか,参加予定の地球環境科学関連学会協議会との対応を図ることとした。

9. 機関誌・財政等検討委員会の設置について

第四紀研究のA4判化について検討するための機関誌検討委員会を設置することを考えてきたが,学会の財政についても同時に検討する機関誌・財政等検討委員会の設置を評議員会に諮ることとした。

10. その他

1997年度第1回評議員会・総会資料を作成した。

◆第1回(新旧第3回合同)幹事会議事録

日時:1997年8月5日(火) 15:30~16:00

場所:北海道大学 地球環境科学研究科 会議室

出席:米倉伸之(会長),太田陽子(副会長),真野勝友,
奥村晃史,小野 昭,小池裕子,斎藤文紀,坂上寛一,
杉山雄一,松浦秀治,真野勝友,山崎晴雄,吉川周作,
斉藤享治(以上,新旧幹事)

1. 寄贈依頼

イギリスのニューカッスル市にある日本科学技術図書館からの第四紀研究の寄贈依頼について,今後,寄贈することとした。

2. 名誉会員の評議員会の出席について

名誉会員となった会長経験者については,今後,評議員会の案内をださない旨,評議員会にその他の審議事項で諮ることとした。

3. 評議員会・総会

1997年度第1回評議員会・総会の打ち合わせをした。

★★★ 第四紀通信事務局が新しくなりました ★★★
広島大学文学部地理学教室 奥村晃史 〒739 東広島市鏡山 1-2-3
kojiok@ipc.hiroshima-u.ac.jp Phone: 0824-246657 Fax: 0824-240320
新事務局の初仕事は原稿を詰め込むだけに終わりましたが、新鮮で充実した通信のために皆様からの投稿をお待ちしています。
次号は11月上旬原稿締切・11月下旬発行予定です。
インターネットにアクセスできる方は第四紀学会ホームページ
<http://www.soc.nacsis.ac.jp/qr/>で最新情報をチェックして下さい。